

「泣尼」の説法

一、「泣尼」の筋立て

したり顔で高座に着いた僧は、おもむろに説法を始める。手筈は十分、今日の説法は感動的なものになるはずである。説法が進むにつれて、聴衆の中から一人の尼の泣き声があがり、それが満座に波及して、いやが上にも説法の有り難さを高めていく。—そのようになるはずだった。しかし、泣き声はいつまでたつても聞こえない。僧は高座の上で困惑し、苛立つ…。周知の通り、出家狂言「泣尼」のひとつこまである。

『醒睡笑』巻四「そでない合点」に次のような笑話がある。

「ゆふべの説経に姥の泣かれつるは、なにのあはれをわきまへてぞ」と問うてあれば、「なにもわが聞きわけたることはなかりし。隣のかかのあめやさめと泣かるるほどに、定めてあしき

稲田 秀雄

ことではあるまいと思うて泣いた^①

談義・説法の中で一人でも泣く者があれば、それは周囲に影響するものだったらしい。むろん、説法自体の有り難さとは別である。狂言「泣尼」の、僧が尼を雇って泣かせようという設定は、この笑話のような効果を期待したものである。和泉流・天理本の僧のせりふに、「高座のきわでないでもらへば、だんぎはありがたうなけれ共、尼ごせのないうつつて、又ありがたがる者もあるげな」とある。

「泣尼」の筋は、このように、施主から説法を依頼された僧が、説法の効果を高めるため、泣いてもらうつもりで涙もろい尼を雇うが、肝心の説法で尼が泣かず、僧が困惑するというものである。ここまでの筋立ては、諸流に共通するが、江戸初々中期の諸流台本を見ると、説法の場面及びそれ以降の展開については、二つの系

統に分かれていることが知られる。

一つは、大蔵虎清本・虎明本の系統である。とりあえず、これを大蔵型としよう。この系統の特徴は、尼が説法の中で泣かずに、その後設けられた酒宴の場で泣くことである。この筋立ては、伊藤源之丞本・虎光本といった江戸中期以降の大蔵八右衛門派の台本に受け継がれる（現行大蔵流は次に述べるように和泉型の筋である）。

今一つは、和泉流（天理本以下現行和泉流まで）、驚流及び狂言記拾遺の系統である。これを和泉型とする。この系統の特徴は、尼が説法の中で居眠りをするという演出をもつこと^③で、それを目覚めさせ、泣かせようとする説法の場面を眼目としており、大蔵型のよ^④うな酒宴の場はない。この筋立ては、現行和泉流はもちろんのこと、現行大蔵流にも受け継がれている。

以上の通り、「泣尼」の筋は二系統に分かれるが、そうした筋立ての相違に関わらず必ず存する僧の説法も、その内容は各流ごとに実は異なっている。この説法は、それ自体独立性のある劇中芸というべきものであるが、そのような説法の内容と「泣尼」の筋（構想）とはどのように関連しているのであろうか。

以下、「泣尼」の眼目である説法について、その各流における内容に関する吟味（注釈的なことも含む）とその劇中における役割（機能）を考察してみることにした。

「泣尼」の説法

一、虎清本・虎明本の説法

まず、大蔵虎清本の説法から掲げよう。虎清本は、まず世間の無常を説き、その後、孟宗・郭巨の故事を引いて孝行の徳を述べる。

- 1 お檀那よう聞かせられい。総じて人間に生まれて、一生の間と言ふものは、風の前の雲、夢の間に散じ易し。三界は水の上の泡と言ふて、少しの間にてあるほどに、後生一大事じやと思し召せ。心又生死の根源を尋ぬれば、只一念の妄執に引かされて、由なく法性の都を迷ひ出て、三界六道に生れ、衆生となれる也。心衆生の此の世は、朝顔の花と思し召せ。朝顔の花は、草花の中にも、たぐひなきあだなる花なれば、朝開暮落と申て、早朝に花咲き、日の光に当たりしほみ、やがて落つる物なり。この世は仮の宿なれば、此花の心を思し召して、心世間の盛衰、有為転変のことはりを述べ、煩惱即菩提、生死即涅槃、有門空門、非有非空門、亦有、亦空門の、四門を宗として、花鳥に心を寄せ、風月に精をまじへ、明らかなる御心が肝要也。

- 2 ことにこなたはもろ果報者也。御両人の親達、子息までも、息災延命にして、何のとほしきことはなし、仏法を宗として、悲しむともがらには、物を施し、ことに親孝行になされよ。唐

の二十四孝を聞かせられい。

3 孟宗と言つし者、老ひたる親の望みなれば、雪のうちのたかんなを尋ねて、親に与へたり。

4 郭巨と言ひし者、一人の子をもつ。今一人残りたる親あり。

計会人なれば、親を養へば子か飢へに臨む。子を養へば、親を育む事ならず、た、我が子を失いて、親を養わんとて、井を掘りて、子を埋まんとて掘りければ、こかねの釜を掘り出し、富貴の家となりたる也。

5 これを見、かれを聞く時は、親孝行にはづれたる事あるまじ。

心長く申せば、下手の長談義也、願以此功德、普及一切、我等与衆生、皆俱成仏道。

これは、まさに（説法中にも引かれるが）「下手の長談義」の諺^⑤通りに作られた説法であろう。ことに1の部分はかなり長大である。所々にある「心」の箇所では、尼に目配せなどしたのであろう。しかし、尼は全く気付かず、この後の酒宴の時に埋め合わせに泣くのである。

1の無常を説く段には独自の表現が多いが、そのうち、典拠が見出されるものを挙げておく。^⑥傍線部「一生の間と言ふものは、…」は、「哀傷の曲舞」〔能「鍾馗」のクセ〕の文句に類似する。金春禪竹『五音三曲集』によれば、

一生は 風の前の雲。夢の間に散じやすく 三界は 水のうへのあは 光のまへにきえんとす。^⑦

とある。共通の依拠資料があるかもしれないが、まずは、これに拠つた可能性が高い。

また、それに続く傍線部「生死の根源を尋ねれば、…」は、仮名本『曾我物語』卷十二「少将法門の事」の法然の説法に見える、

抑、生死の根源を尋候へば、たゞ一念の妄執にかどはされて、よしなく法性の都をまよひ出て、三界六道に生、衆生とはなれり。^⑧

という箇所と近似しており、これに拠るものかと考えられる。

次に、虎清本に続く大藏流古台本たる虎明本を見てみよう。右に引いた虎清本の段落との対応を各段落の末尾に括弧に入れて示す。

I 惣じてお檀那、そなたもお果報者なり、二人の親子も息災にして、もろ果報とはそなたの事じや程に、なるべきほど遊山をめぐされたり、又親孝行にはづれたる事は御さなひぞ、よく聴聞めされ候へや、はなかも(2)

II 扨唐土に、むたうじやう王とて王ましくたり、かの王、春の花を見ては悟りとし、秋の月をながめては長夜のねふりを覚まし、一生を暮らし給ひしとなり、

III 又親孝行のたんそ孟宗と言つし者は、老ひたる親に与えんと

て、雪の内のたかななを尋て親に与へたり、(3)

IV 伯瑜と申たる者は、母のうち杖にて泣く涙、全く杖の痛きに
あらず、日頃打たれたる杖より弱りたるを見て、悲しむ涙なり、
V 郭巨と言つし者、一人の子をもつ、けいくわ人なり、今一人
残りたる親あり、親を養へば子が飢へに臨む、子を養へは親を
はごくむ事ならず、たゞ井を掘りて我が子を埋みて、親を養は
んとて、井を掘りければ、こがねの釜を掘り出し、富貴の家と
なりぬるなり、(4)

VI たゞかれをき、是をきくに、孝行にはづれたる事有まじひ、
今日の説法是までなり、願以此功德普及於一切、我等与衆生皆
具成仏道、(5)

虎明本では、虎清本の世間の無常を説く段(1)を削除し、孝行の
徳を述べる部分を特立させている。実は、虎明本の後記には、虎清
本の1段に相当する部分も記載されているが、そこには「此かたり
まへかどののりとさういにて候間是は無用にて候」と注記する。
この「まへかどののり」とは、曲の冒頭の、談義について無知で
あるとす僧のせりふ(「そうじてだんぎせつほうのわけをしら
ぬ」^⑨)を指し、そうしたせりふに符合させるため、虎明本では右の
ような改変が行われたようである。

その他の相違としては、むたうじやう王(II)と伯瑜の故事

(IV)の追加が挙げられる。このうち、むたうじやう王の故事は出
典不明であるが、「春の花を見ては」以下の文句は、後に触れる和
泉流・天理本の説法にも存する。四季の推移のうちに世間無常のさ
まを悟る例として、虎清本にあった無常の説示(1)に代る役割を
果たすものようであるが、前段(「親孝行にはづれたる事は御ざ
なひぞ」)からの続き具合は必ずしもよくない(現行大蔵流では、
このIIの段は「眠りを覚まし」という文句を生かして、尼を目覚め
させる意図を含めた表現となっている)。

伯瑜の故事は、これも天理本にあり、しかもほとんど表現が同
じであることが注目される。伯瑜の故事には「泣く」「涙」とい
語が含まれる。この故事がもし和泉流から取り入れられたとすれば、
説法の文句にことよせて泣かせようとする和泉流の演出(後述)も
同時に取り込まれた可能性があらう。

ただし、虎明本の段階で、天理本に見られる「説法の間には尼が眠
る」演出があったかどうかは定かでない。少なくともそうした演出
は明記されていない。しかし、大蔵型の筋を伝えた八右衛門派の伊
藤源之丞本や虎光本には、「尼が眠る」演出が明確に記されている
(和泉流の影響か。あるいは、群小流派などを介しての影響か)。大
蔵八右衛門派では、少なくとも江戸中期以前にこの演出が取り込ま
れたようであり、それは現行大蔵流にも受け継がれているのである。

以上のように、虎清本の説法は虎明本にそのまま継承されず、大幅に改変された。しかし、大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本・虎光本には、少し簡略化されつつも基本的に（酒宴の際に尼が泣く大蔵型の筋とともに）継承されていくのである。¹⁰⁾

虎明本の説法は、それに虎清本の無常の説示の部分（1）を少し加えるかたちで、現行大蔵流（和泉型の筋をもつ）に受け継がれる。各種の番外曲を集めた天理堀村本（「狂言 大外」）「泣尼」には、すでにこの現行大蔵流に近い説法が見られるが、「酒宴することもあり」と注記するように、一方では虎清本以来の大蔵型の筋も保持されており、過渡的な様相を示している。

三、天理本の説法

和泉流天理本の説法は次のようなものである。施主が親の孝養のために建立した持仏堂の堂供養にともなう説法という設定であり、総序として四恩のことを示した後、丁蘭・郭巨・伯瑜・柴羔等の著名な孝子説話を引きつつ孝行の徳を説くもので、これもかなり長大ではあるが、先の虎清本や虎明本よりは、はるかに首尾一貫した内容となっている。

A 今日今時の志は、二親菩提のために、一堂を建立し、一花香を手向けたまふ、これ皆親に孝ある故也

B されば世に四恩あり、第一には天地の恩、第二には国王の恩、第三には父母の恩、第四には衆生の恩、是を四恩とたてられた、中にも重きは父母の恩、それをいかにといふに、骨は父の恩、肉色は母の恩、爰をもつて、父母報恩経にも説きおかれた、

C すでに釈迦仏も、御母摩耶夫人敬養のために、たうり天に上り、安居の御法を説きたまふ、

D 又、丁蘭テイランは母におくれ、悲しみのあまり、そのかたちを木像に作り、存生のごとく物を云、朝夕孝をつくしけるが、他人是をみて、あまりの事と憎み、木像の胸に針をさしければ、その針のあとよりも、血の流る、事、滝の水のおつるがごとく、是みな孝行の志、深きがいたす所なり、

E 又、郭巨クワコキョは老たる母を持、又一人の子を持、此子に扶持するならば、親子外面に成べし、たゞみどり子を埋まんとて、野辺に出て、打たる鍬の下よりも、こがねの釜を掘り出し、富貴の家となりぬ、

F フシ又、伯瑜ハクユか母に打たれし杖に泣く涙、まつたう杖の痛きにあらず、日頃打し杖よりも弱りたるを見て、泣く涙也、

G 詞惣じて、人間の無常を観念するに、春の花を見ては悟りとし、秋の月を見ては眠りを覚ます、かゝる説法の庭にて、若一人成とも眠りのきざすともがらは悪人、金言は耳に入がたしと、

仏も説きおかれた、

H 又、爰に泣かいてかなわぬ物語が有、魯国の柴羔すいかは父におく

れ、その嘆きやむ事なし、喪モトに入て血の涙を流し、泣く事三年となり、其後笑といへ共、齒かをあらはす事なし、フシかの柴羔といふ者はた、の涙おも流さずして、血の涙を流し、三年までさへ泣いたるそや、

I 詞しよせん、下手の長談義は無用の物とある、其上、此中万お肝入で、定而施主のおくたびれでもあらうず、とかく廻向申さう、

J フシた、かれを聞、是をみるに、孝行にはつれたる事あるまし、今日の説法是までなり、願以此功德普及於一切、我等与衆生皆共成仏道、

ここに引かれる故事・説話については以前注釈を施したことがあるが、その後気付いたこととしては、Gの傍線部に関連して、法華宗の談義書である『因縁抄 六難九易』（西教寺正教蔵）の「不眠座高厳麗座」という句を説く部分にも、

御眠一入丁衆様ノ御為ニハ、御迷惑ナルヘシ。此毎日ノ御談義

ニモ、フラリくト御眠候テ、カ、ルイマシメヲ御存知無ク、
…⑭

のような、説法の間に眠る聴衆を意識した口吻が見られることを指

摘しておく。現実の説法でも、このような眼前の聴衆を意識した当意即妙の表現が行われていたのであろう。

天理本の説法では、特にF・G・Hの傍線部に注意したい。これらは、いわば二重の伝達を意図した表現である。すなわち、聴衆に對しては、孝子説話の一節または教訓であり、尼に對しては、「泣け」または「目を覚ませ」というメッセージになっているのである。

伯瑜の故事における「泣く涙」の繰り返し効果がなしと見るや、孝子の例を掲げてきた説法の流れをあえて破るかたちで、人間の無常のさまを述べ（「眠りを覚ます」という言葉の利用）、説法の場合で眠つてはいけないという、一般の聴衆に向けた教訓を持ち出すと見せて、尼の気付きを促す。さらに血の涙を流して泣いた柴羔の故事を駄目押しのように付加するなど、泣かずに居眠りする目の前の尼に苛立ち困惑する僧の心理の流れに即した説法の構成になっていることがわかる。

このうち、Fの伯瑜の故事は大蔵虎明本にもあり、しかも表現が近いことは先にも指摘した通りである。天理本の場合は、ここで初めて「泣く」「涙」という言葉が発せられる。

ともかく、天理本以下和泉流の説法においては、四恩を総序とし、孝行の徳を説くことで一貫しており、説法中の言葉をたくみに利用して、「泣け」「目を覚ませ」というメッセージを発していること等、

狂言全体の構想と説法の内容が有機的に結びついていることが確認される（なお、群小流派の台本と目される狂言記拾遺でも、説法中に「涙をこぼし」「眠りを覚まし」等の言葉が見られ、天理本以下の和泉流演出と同じ効果をねらっているようである。ただし、故事は郭巨のことを引くのみ）。

四、享保教本の説法

鶯流は、仁右衛門派・伝右衛門派ともに、和泉型の筋をもち、説法の内容も大蔵・和泉いずれにも共通する故事・説話を用いているが、後生を願うことを勧める段など、独自の部分もある。以下、「泣尼」に関しては鶯流最古の伝本である、伝右衛門派の享保教本の詞章^⑮掲げる。「」内は注記で補われた部分である。なお、原本にある振り仮名は大部分を省き、節付けを示すゴマ点及び演出に関する注記も省略した。

- a 何モ奇特トヨウ御参リヤツタヨ、今日ノ堂供養ニハ有リ難イ
所ヲ説テ聞セウズル間、皆トツクリト耳ヲスマイテ聞セラレイ、
b 「昔大唐国ニミタラセウ王ト云国王ノヲハシケルガ、春ノ花
ヲ見テハ悟ヲヒラキ、秋ノ月ヲ詠テハ睡ヲサマシ給フ、」
c サレバ此人界ニ生ヲ受ル衆生ニハ、先ツ天地ノ恩国王ノ恩衆
生ノ恩父母ノ恩トテ世ニ四恩有ル内ニ、第一重キハ父母ノ恩ナ

リ、夫ヲ如何ニト云フニ、先ツ骨ハ父ノ恩徳、肉身ハ母ノ恩ナ
リト正敷報恩経ニモ見ヘタリ、

- d 父ノ恩ガ深キト云ヘト、又母ノ恩モ浅カラヌ事ナルゾ、未生
已前ハ母儀ノ胎内ニ寄十月ノ苦ヲカケ、適人界ニ生ヲ受テモ、
幼少ノ時ハ乳房ヲハナサレズ養育セラル、ニヨツテ、釈尊モ御
母摩耶夫人ノ孝養ノタメニ、阿難ニ対テ恩重経ヲ説ヲカレ、切
利天ニテハ安居ノ御法ヲ宣給フト聞、

- e 「又丁蘭木母トテ往古ノ丁蘭ハ死シタル母ヲ木像ニ作り生タ
ルゴトク敬ト聞、」

- f 又伯兪ハ母ノ打杖ノ此以前ヨリモ弱タルハ、御命ノ尽サセ給
フカト嗟シ事ヲ、今ノ世マテモトモニ袂ヲ濡、是ヲ見彼ヲ聞
ニ付テモ、約束ノゴトク、泣ヌハ不思議ナリ、

- g 皆ノ衆モ能後生ヲ大事ト御願ヤレ、後生サヘ願ヘハ仏ニ成ル
ハ疑ナイ、其子細ハ「有経文ニ」諸仏念衆生、衆生不念仏、父
母常念子、々不念父母ト、説タ、此心ハ諸々ノ仏ノ衆生ヲ思
召ハ、朝夕親ガ子ヲ思フ様ナレトモ、子ガ必親ヲ思ワヌ物ジヤ、
其ゴトク仏ハ衆生ヲ扶度ノト思召ド、衆生カ仏ヲ思奉ヌト
有ル事ナレハ、頼敷思フテ、カマヘテヨウ後生ヲ御願ヤレ、

- h 又親孝行ナレバ天道ニモ叶、夫ヲ如何ニト云フニ、大唐国ニ
郭巨ト云フ者ノアリシガ一人ノ老母ヲ持、独ノ男子ヲ持ツ、余

ニ貧家ノ住居ヲセシ故、所詮此子ヲ世ニ立ント致サバ、母諸共
ニ飢ニ疲テ死ヘシ、所詮我独子ヲ土ニ埋、母ヲ楽々ト養ント思
イ、大地ニ打付ル歟ノ下ヨリモ金ノ釜ヲ掘出シ、其身ノ事ハ申
ニ及ズ、子々孫々ニ到迄富貴ノ家ト栄ルモ、皆是ニ親ニ孝有ル
ニヨツテナリ、加様ニマノアタリニ奇特ノ有ル事モ、親孝行天
モ納受マシマス故トカヤ、是ヲ思イ彼ヲ見聞ニツケテモ、約束
ノコトクニ、一度モ吼ヌハ悪キナリ、

i 聴衆ノ衆モ未明ヨリ詰ラレテ、草臥デアラウニ愚僧ガモトヲ
ラヌ口中デ長談儀ハ入ラサル事ナレハ、今日ノ説法ハ是迄ナリ、
願以此功德普及於一切我等与衆生皆共成仏、

右のうち、gは後生を願うことを説く内容で、孝子説話を並べる文脈の中ではやや浮き上がっている感があるが、この段は仁右衛門派にはなく、伝右衛門派独自の部分である（他は両派ほぼ同じ¹⁶）。なお、この中の「諸仏念衆生、衆生不念仏、父母常念子、々不念父母」という章句は、仮名本『曾我物語』巻七「小袖乞ひて出でし事」や金刀比羅本『保元物語』巻中「為義最期事」に見えるもの¹⁷である。

享保保教本をはじめとする鬻流では、天理本に見られたような、説法の文句にことよせて尼の目を覚まさせ泣かせようとする工夫はなく（わずかに、fの「袂ヲ濡」という表現が相当するか）、f・

hの傍線部のようにかなり露骨な表現をする（この部分ゴマ点あり）。享保保教本では、その箇所に、

○尼ヲ見ル、扇ツカイナガラ咳ニツスル時尼目ヲサマシ仕手ノ方ヲ見ウツカリトシテ居ル、目ニテ教泣仕形シテ見スル（下略）

○右ノ足一ツツヨクフム、尼驚キ目ヲサマシスグアクビヲシテ左右ノ手カキサスリノビナドスル、シテハキツトシバラクニラミ付（下略）

のような注記があり、僧が所作や表情によって尼の気付きを促す演技を行なったことがわかる。また、仁右衛門派の賢茂五番綴本では、やはりf・hの傍線部の後にそれぞれ、

○尼ノ方ヲ見テエヘンくナケくト扇ニテ高座ヲタ、ク、尼ビツクリシテ後口ヘ手ヲツク、シテナケくくナケイヤイト云乍扇ニテ打アド（施主を指す。引用者注）ノ方ヲ見テ口ニ手ヲアテル

○尼右ノ内ニ初ノ通り子ムリ居ルユヘシテエヘンくト扇ニテ打ニビツクリトシテヲキシテノ貌ヲミル、シテナケくト扇ニテタ、キナケイヤイトアドノ方ヲ見テキモヲツツシタル躰ニテ口ニ手ヲアテル

と注記する通り、扇で高座を叩きながら（おそらく小声で）「泣け」「泣けいはい」と、尼に対して直接気付きを促すせりふを発するの

である。

五、「泣尼」の構想と説法

大藏虎清本においては、僧の（尼に対する）「泣け」という意思の伝達と説法の言葉とは必ずしも関連付けられていなかったが、それに次ぐ虎明本では、伯瑜の故事が取り込まれることによって少し関連が生じたようである。江戸中期以降の大藏八右衛門派では、和泉流に江戸初期からあった「説法の最中に尼が眠る」という演出が取り入れられ、同時に「泣け」「目を覚ませ」という僧の思惑と説法の言葉がさらに密接に関連するようになる。

大体、近世の大藏流（虎清本・虎明本そして八右衛門派）では、「説法後の酒盛りの際に尼が泣く」という場面があり、そちらの方に重点があったせいも、説法の言葉を利用して尼を泣かせようとする工夫はもととなかったのである。橋本朝生氏が言われるように、大藏流の行き方は、どちらかといえば「尼中心」なのであった。つまり、説法場で泣けなかった尼が、埋め合わせに酒宴の場で泣くという、「泣くべき場面」で泣かず、泣かなくてもよい場面で泣くというちぐはぐな対応が構想の中心であったといえよう。

これに対して、和泉流では、最古本の天理本以来、僧の「泣け」「目を覚ませ」という意思と、説法の言葉が有機的に関連付けられ

ていた。和泉流は、古来、泣かない尼に対する僧の高座の上での困惑に焦点があったのである。僧の「泣くべき場面で泣かない（居眠りをする）尼をいかに泣かせよう（目覚めさせよう）とするか」という、焦りや苛立ちを伴ったふるまいを（遅くとも江戸初期から）見どころとしていたのである。

鶯流では、和泉流にもある伯瑜の故事を引くにもかかわらず、「泣け」（または「目を覚ませ」という僧の意思と説法の言葉とはあまり関連しない。そうした心持ちは、尼をにらむ表情とともに、小声ながら極めて直截的なせりふとして表現されるのである。鶯流は、和泉型の筋をもち、説法の場面が見せ場になっているはずなのだが、説法の言葉を利用して尼を泣かせる（目覚めさせる）という工夫はなかったのである。そうした「二重の伝達」よりもむしろ、僧の所作や表情で面白く見せようとしたのであろう。

こうして見ると、説法に「二重の伝達」を織り込む和泉流の工夫があらためて注目される。泣くはずの尼が泣かないという事態に即応して、説法中の言葉を用いて気付かせようとする「泣尼」の僧の試みは、例えば、『沙石集』巻六「説経師下風讀タル事」などの、眼前のハプニングに対応して臨機応変に説法の文句を替える、機知に富んだ説経師のふるまいに通じるものがあろう。そうであるとなれば、「泣尼」（特に和泉型）という狂言は、説法場で起こる滑稽

な出来事を劇全体の中心に据えた、いわゆる「唱導説話」¹⁹の立体化と見ることもできよう。そうした「唱導説話」は、院政期の醍醐寺藏『転法輪秘伝』²⁰からもすでにうかがえるような、常に眼前の聴衆を意識して行われる説法の芸術的性格を抜きにしては成り立ち得ないものであった。

劇中芸たる説法と狂言全体の筋(構想)をたくみに絡ませた和泉流「泣尼」の演出は、不測の事態にも即座に対応して言葉をついで行く、説法というものの芸術的性格をよく捉えているといえよう。

注

- ① 鈴木菜三氏校注『醒睡笑(上)』(岩波文庫、昭61)による。
- ② 宗家である大藏弥右衛門家では、「泣尼」は虎明本以降の台本に見えず、明治三年に現行曲に組み入れられた。
- ③ 「尼が説法で眠る」という演出は、大藏虎清本や虎明本には明記されず、それらの段階ではなかったものと考えられるが、後述するように、江戸中期以降の大藏八右衛門派(伊藤源之丞本や虎光本)には存するのである。
- ④ 虎清本の引用に際しては、適宜漢字を当て、句読点を施すなどして表記を改めた。以下引用の他の台本についても同様の措置を施した場合がある。
- ⑤ 橋本朝生氏「狂言と諺」(『中世史劇としての狂言』若草書房、平9所収)には、狂言「泣尼」は「下手の長談義」の原義(退屈な談義)を

「泣尼」の説法

「文字通り舞台でやって見せて笑わせようとするのであろう」という指摘がある。

- ⑥ 虎清本は、日本の文学・古典編『能 能楽論 狂言』(ほるぷ出版、昭62)に、橋本朝生氏による注と解説が収められているが、以下に掲げることはそれを補うものである。
- ⑦ 表章氏・伊藤正義氏校注『金春古伝書集成』(わんや書店、昭44)所収の金春八右衛門家伝来本による。
- ⑧ 日本古典文学大系『曾我物語』(岩波書店、昭41)所収十行古活字本による。
- ⑨ 田口和夫氏「説法の狂言二題」(『能・狂言研究—中世文芸論考—』三弥井書店、平9所収)は、「泣尼」の僧が説法不得意であるという設定は後から付加されたものと指摘する。確かに、この僧は全く説法が出来ないわけではない。むしろ和泉流・天理本で、僧が自らの説法について「あの坊主のだんぎは、ありがたいけはなふて、くたびれがいて、かしらがいたう成」という評判がある、と言うように、弁舌に関わる技術的な面での「下手」さが本来の設定であったのかもしれない。
- ⑩ 琴堂文庫藏八右衛門派六冊本では、この説法はさらに簡略化され、間に「ナキナキ」という言葉を頻発するなどの工夫を加えている。
- ⑪ 天理堀村本所収曲の概要については、拙稿「狂言番外曲の伝承経路(上)」「下」天理堀村本所収曲をめぐって」(『藝能史研究』140、142、平10・1、7)参照。
- ⑫ 徳田和夫氏「孝子説話をめぐる唱導と絵解き—宗教文化研究と説話の場—」(『説話文学研究』39、平16・6)は、孝子説話を引く談義・説法の例として、狂言「泣尼」を挙げる。
- ⑬ 北川忠彦他校注『天理本狂言六義(下巻)』(三弥井書店、平7)「泣尼」(稲田担当)参照。

- ⑭ 阿部泰郎氏編『因縁抄』（古典文庫、昭63）による。
- ⑮ 享保保教本は末尾に「談義ノ替」として別の詞章（冒頭部の替え）も記すが、ここでは本演出のものによる。
- ⑯ ただし、仁右衛門派の寛政有江本では、eの丁蘭の故事はない。
- ⑰ この章句のさらなる典拠は、覚鑿撰と伝える『孝養集』であることが、山西明氏「仮名本『曾我物語』と『孝養集』」（山田昭全氏編『中世文学の展開と伝教』おうふう、平12所収）に指摘されている。
- ⑱ 注⑥の橋本朝生氏による虎清本「泣尼」の解説。
- ⑲ 阿部泰郎氏「唱導―『唱導説話』考―」（『説話の講座3 説話の場―唱導・注釈―』勉誠社、平5所収）。なお、『古今著聞集』卷十六や『雑談集』卷四に「泣尼」の類話があることはすでに指摘されている。
- ⑳ 説教師となるための心得を問答形式で説いたもの。馬淵和夫氏・田口和夫氏「翻刻・醍醐寺蔵『転法輪秘伝（説法秘条）』」（『研究紀要（醍醐寺文化財研究所）』18、平12・10）参照。